
ポストヒューマニズムと教育の未来

— 基本概念と教育学への示唆 —

法政大学 坂本 旬

はじめに

ソーシャルメディアの登場は社会に大きな影響を与えつつある。教育にとっても大きな問題であることは間違いないが、教育学はこの新たな課題にどのように対応すべきか、いまだ模索が続いている。さらに生成 AI の登場は、問題をより複雑なものにしつつある。果たして、これらの新たなテクノロジーの登場は、教育のあり方をどのように変えるのだろうか。また、教育はどのように対応すべきなのだろうか。この議論の鍵を握るのが人間中心主義を乗り越えて、動物などの地球全体の生態系、そして非生命体を含むエイジェンシーの関係性に焦点を当てるポストヒューマニズムだと筆者は考える。それはおそらく、人間中心主義を土台として形成されてきた教育学そのものを根本的に変えてしまう可能性がある。

そして、もう一つの懸念は日本の教育政策における教育工学の影響である。社会のデジタル化が進むにつれて、EdTech を背景とした教育工学が教育政策に占める位置が大きくなり、今日では日本の教育政策の根幹に影響をもたらしているように見える。本来こうした潮流に対抗すべき教育学は、教育におけるテクノロジーを無視するか、あるいは「反デジタル」の狼煙をあげるにとどまっており、説得力のある議論をすることができないように思われる。一方、教育工学界は比較的男性中心であり、ジェンダーバランスについても十分に意識されていないように見える。これは組織的な問題というよりも、教育工学そのものが有している男性中心主義に基づくものかもしれない。残念ながら、今日まで教育学はこうした問題に触れてこなかった。このような問題もまた、ポストヒューマニズムをめぐる議論と関わっている。

筆者は昨年「デジタル時代のシティズンシップと未来」および「子どもの学びとAI：ポストヒューマンイズムの視点から」と題する論考を執筆した。この論文を執筆している現在、これらの論考は未公開であるが、いずれもポストヒューマンイズムを扱っている。前者の論考は、ソーシャルメディア倫理をテーマにした書籍『ソーシャルメディアの倫理的デザイン：未来のための再構築』（岩波書店）の一章として執筆したものであり、もともとポストヒューマンイズムをテーマにした論考ではなかった。同論考が下敷きにしたのは、昨年3月に公開した「陰謀論に対抗するためのメディアリテラシー教育原則」であり、それに加えてICT教育における道具主義批判の視点を加えた。とりわけ、筆者が問題にしたのは、人間と道具を切り分けて考える見方であり、もうひとつの重要な視点がダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」であった。

ハラウェイのこの論考は1985年に書かれたものであり、当時のフェミニズム思想に大きな影響を与えるとともにポストヒューマンイズムの形成に寄与するものであった。我々はすでに機械と人間のハイブリッドであるという彼女の宣言は、当時流行していたサイバーパンクの影響を受けたものだといってもよいだろう。しかし、今改めてこの宣言を読み直すとどうだろう。常にスマートフォンを手放さず、スマートウォッチを身につけ、ネットワークに接続されている有様は、サイバーパンクが描いた世界観に大きく近づいているとは言えないだろうか。それどころか、サイボーグという用語はすでに医学用語となっており、脳神経と機械を接続し、脳によって直接機械を作動させることもはや現実のものとなっている。40年前の未来は今の現実である。

ハラウェイの世界観に埋め込まれた倫理を問うことは、筆者に求められたソーシャルメディアの倫理の考察に大いに役立つであろう。筆者の考察の出発点はそこにあった。しかし、ハラウェイの思想はそれ以上の意義を有していたのである。それがポストヒューマンイズムである。ポストヒューマンイズムはポスト構造主義におけるフーコーやデリダなどの反ヒューマンイズムの系譜を引き継ぐとともに、多様な領域で広範に形成されていった思想及び理論であり、ハラウェイはフェミニズムの視点から、それらを焦点化し、後の批判的ポストヒューマンイズムと呼ばれる理論的潮流の基盤となった。筆者の論考「デジタル時代のシティズンシップと未来」は、その入り口までを記述したものであり、まさにその地点にたどり着い

たところで終わっている。実際、ポストヒューマニズムと教育学の関係を理解しようと思うならば、哲学、芸術、動物学、環境学など多様な学問領域にまたがるポストヒューマニズム理論の潮流を紐解く必要がある。

筆者の論考「子どもの学びと AI：ポストヒューマニズムの視点から」は、ポストヒューマニズムの視点から AI と教育の関係を述べたものであるが、1 万字という制限があったため、問題提起にとどめている。生成 AI の登場はポストヒューマニズムにおける議論に大きな影響を与えつつある。ポストヒューマニズムでは、人間と非人間の境界を問い直すが、生成 AI の振る舞いは非人間存在のエイジェンシーとしてみなすことができるからであり、人間と生成 AI との関係を問うことは、ポストヒューマニズムの議論の一つの大きなテーマとなっているからである。

この論考では、ポストヒューマニズムがユネスコの議論にも影響を与えつつあることを取り上げている。ポストヒューマニズムは、人間中心主義が西欧白人男性主義であることを暴き、周辺化された人々に目を向けさせるとともに地球全体の持続可能性をめざす思想である限り、ユネスコにとっても無視することができないからである。この論考は、白梅学園大学子ども学研究所が発行する『子ども学』第 14 号のために書いたものだが、『子ども学』第 13 号はまさにポストヒューマニズムがテーマであった。このことは、ようやく日本の教育学においてもポストヒューマニズムに関心が向きつつあることを示していると言えるだろう。

本稿は、ポストヒューマニズムの概要を示すとともに、教育学との接点を考察することによって、ポストヒューマニズムが教育学にどのような影響をもたらさうのか、その可能性を明らかにすることを目的とする。ただし、そのためには数多くの議論を検討しなければならない。まず、ポストヒューマニズムの定義を行い、筆者の研究の出発点となったハラウェイの「サイボーグ宣言」、ローザ・ブリイドッティの「ポストヒューマン」論およびバラッドの「エージェンシャル・リアリズム」論を取り上げ、その教育学的意味を検討する。そして、最後に日本の教育学におけるポストヒューマニズムの受容について検討する。

1. ハラウェイとサイボーグ

ポストヒューマニズムとは、近代が形成してきた「人間」を中心とする思想

(ヒューマニズム)を問い直し、人間と非人間、すなわち動植物や環境、テクノロジーなどとの関係性に焦点を当て、その再構築によって、人間であることの意味を問い直す思想潮流と言えるだろう。ポストヒューマニズムの源流を辿るならば、構造主義からポスト構造主義に至る思想・哲学の影響を抜きには語れない。ミシェル・フーコーが『言葉と物』(1966)の中で、人間の始まりと終焉について語ったことやクロード・レヴィ＝ストロースが『人種と歴史』(1952)や『野生の思考』(1962)で西欧白人男性を中心とするヒューマニズムを批判し、「人間」の確立ではなく、「人間」の解体を目指したことはよく知られている。また、ジャック・ラカンは『エクリ』(1966)で、自己同一的で透明な主体を前提とするヒューマニズムを批判した。

さらに、ルイ・アルチュセールは構造主義的マルクス主義の立場から、人間主義を批判した。その主張は1968年のインタビュー記事にわかりやすく表現されている。アルチュセールは、用語に対する質問の中で次のように答えている。

人間主義(ユマニスム)という言葉は、プロレタリア階級にとっては真実で重要なもう一つの言葉、すなわち階級闘争という言葉を打倒するために、つまりそれを殺すために、それを利用するブルジョア・イデオロギーによって用いられているからです。……マルクス主義の伝統はすべて、歴史を作るのは《人間》であるということを拒んできた。なぜか? なぜなら実際には、したがって事実としては、この表現は、プロレタリア階級にとっては真実で重要な他の表現、すなわち歴史を作るのは大衆である、という表現を打倒するために、つまり殺すためにそれを利用するブルジョア・イデオロギーによって用いられているからです。(Althusser,1968=1975:182)

アルチュセールは独自のイデオロギー論をもとに、ブルジョア・イデオロギーによって人間主義が階級的利害関係を覆い隠してきたと主張する。アルチュセールの反人間中心主義の特徴は、『資本論を読む』(Althusser & Balibar,1968=1974)によって、初期マルクスの『経哲草稿』と後期マルクス『資本論』の間の認識論的切断を明らかにし、それによってマルクス主義から人間中心主義を明確に分離したことである。アルチュセールの反人間中心主義的なマルクス主義はその後の

フェミニズムに大きな影響を与えるとともに、フェミニズムもまた、構造主義的マルクス主義の欠陥を克服する道を開くこととなった。

ハラウェイは「状況に置かれた知」に関する論考の中で次のように書いている。

人間主義的なマルクス主義は、その源泉において汚染されていた。というのも、マルクス主義は、人間が自己を構成する過程で自然を支配するという存在論的な理論を形づくっていたし、さらには、これと密接に関連して、女性の行ってきたことからのうちの賃金不適合とされてきたことからのすべてに関して、それを歴史化する能力を欠いていたからである。しかし、依然として、マルクス主義は、客観的見方についての我々なりの教義を模索する立場として、フェミニストたちの認識論的な精神衛生上、有望な源泉でありつづけた。マルクス主義という出発点は、我々なりの各種の立場論に到達するためのツールの数々、たゆみない具現化作業、実証主義や相対主義によって力をそがれてはいない豊饒なヘゲモニー批判の伝統、そして媒介行為についての陰影のある理論を提供したのである。精神分析のいくつかの潮流、特に、英語圏の対象関係論は、こうしたアプローチにはかりしれない影響を及ぼした。対象関係論は、ある時期、マルクスやエンゲルスの手になる著作をさえ凌ぐ影響を、アルチュセールをはじめとするマルクスやエンゲルスの衣鉢をついでイデオロギーと科学という主題を取り扱おうと標榜した者たちは言うに及ばず、米国の社会主義フェミニズムに対しても及ぼしたのではないかと思う。(Haraway.1991=2000:356-357)

ハラウェイはアルチュセールの反人間主義を肯定的に受容するが、同時にマルクス主義がジェンダーに関わる問題への批判に辿りつかなかったことを批判する。この問題はフェミニズム運動自体の問題でもあった。ハラウェイは「マルクス主義事典のための『ジェンダー』」の中で、「第二波フェミニズムの初期には、自然／文化という二元論的な論理構成に対する批判や、その弁証法版である、「人間」による「労働」を介した「自然」の支配、領有もしくは媒介というマルクス主義的な人間主義の物語りに対する批判が行われた。しかし、批判の矛先が、そこから派生した性（セックス）／ジェンダーの区分にまであえて向けられること

はなかった」と述べている (Haraway,1991=2000:255)。批判の矛先が性 (セックス) / ジェンダーの区分に向かわなかったのは、フェミニズムに対する生物学的決定論的批判に対抗するためには、この区分が役に立ったからである。しかし、この区分は「自然 / 文化という二元論」に依拠しており、そこには理論的な限界が存在する。ハラウェイは「本質的アイデンティティとしての女性ないし男性という図式は、分析されることもなく、政治的に危険な状態のまま放置されることとなった」と指摘している (Haraway,1991=2000:255)。

ハラウェイの「サイボーグ宣言」はまさにその新たな思想的枠組みを示したのである。ハラウェイは「サイボーグ宣言」の冒頭で「我々は皆、キメラ、すなわち、機械と生体のハイブリッドという理論化され製造された産物であり、要するに、我々はサイボーグである」と書いた (Haraway,1991=2000:288)。このサイボーグとは一つのメタファである。この宣言が発表された1985年はサイバーパンクと呼ばれるSFのブームとパーソナルコンピュータの普及が始まる時期であった。実際、ハラウェイは後のインタビューの中で、この宣言の執筆に初めてコンピュータを使ったと述べている (Haraway,2000=2007:58)。宣言の最後に当時ハラウェイが読んだSFについて書かれているものの、テクノロジーとしてのサイボーグそのものについて語っているわけではない。(なお、「サイボーグ宣言」はオリジナルの1985年版と、その細部を修正した1989年版がある。本稿は主として後者から引用している。)

では、ハラウェイにとってサイボーグとは何だろうか。ハラウェイは「サイボーグは、ポストジェンダー社会の生き物」であり、西欧的な意味での起源を持たない「究極」のアイロニーだと述べた上で、以下のようにアイロニーであることの意味を説明する。

サイボーグは、個を抽象的存在—あらゆる存在関係から最終的に切り離された、まるで宇宙に行った人間のような存在—として表現するという「西欧」のエスカレートする支配関係の黙示録的な究極目的³だったからである。「西欧」ヒューマニズム的な意味での起源物語りは、起源の一体性、充足、喜び、恐れといった神話に基づいており、こうした神話を体現するのが、男根の母という、すべての人間がそこから切り離されることによってしか生まれえな

かったような存在である (Haraway,1991=2000:289)。

また、別の箇所では「ある種の自己解体・再組み立てされ、集合的・個的であるようなポスト近代の自己である。こうした自己こそ、フェミニストたちがコードする必要のある自己である」と書いている (Haraway,1991=2000:314-315)。こうしてハラウェイは、サイボーグを、近代が創り上げてきた白人男性をモデルとする「人間像」に対抗する存在として、具体的には「有色女性」などの「アウトサイダー・アイデンティティ」をイメージして描くのである (Haraway,1991 = 2000: 333,336,337)。

とはいえ、パーソナルコンピュータの普及に代表される社会の情報化の動向と無縁だったわけではなく、その動向に深い関心を示しながら、白人男性をモデルとする近代的個人を超克する新たな人間のモデルとしてサイボーグを選んだことは間違いない。そしてハラウェイはそのモデルを通して「サイボーグのポリティクス」という概念を提唱する。サイボーグポリティクスは「男根中心的で論理中心主義のセントラル・ドグマに挑む闘い」であり、これは「大文字の男性と女性に混乱を持ちこむような接合のしかたであり、欲望——ことばやジェンダーを生成する存在として想定されている力——の構造を覆し、ひいては自然と文化、鏡と目、奴隷と主人、からだと心といった「西欧」アイデンティティの再生産構造やモードを覆す」ことを意味するという (Haraway,1991=2000:337)。その上で、「科学やテクノロジーを考え、支配の情報工学に挑戦して、強力な活動を行ううえでの一つの方策を基礎づけることになるであろう神話の体系」の存在を肯定する (Haraway,1991=2000:346)。

ハラウェイはここで「支配の情報工学」という用語を登場させている。そして、情報社会の進展とともに、資本主義はテクノロジーの革新を通して、「心地よい旧来の階層的支配から、支配の情報工学と私が称する身震いするような新しいネットワークへの変遷」 (Haraway,1991=2000:310) をもたらすと警告する。ハラウェイはいう。「支配の情報工学は、不安がいちじるしく増幅され、文化が疲弊し、最も傷つきやすい者が生存するためのネットワークが常に欠落しているような状態としてしか描写のしようもない」と (Haraway,1991=2000:329)。こうした現実は、今日の教育現場にすでに存在している。EdTech に代表される ICT 教育における

道具主義は、数値化を通して周辺化された人々の声をかき消してしまう。それが今日の教育工学の姿である。例えば、ロメロ・ホールらは、インストラクショナル・デザインの現場に対して、「学問の実践を規定する支配的なパラダイムによる男性主義的言説は、学問の世界において女性をさらに疎外し、周縁化することを目的とする複数の性差別的な形態をとりうる」と指摘している (Romero-Hall et al., 2018)¹。このような状況に対して、ハラウエイは「我々の身体を創造しなおすうえでは、コミュニケーション・テクノロジーとバイオテクノロジーが必須のツールとなる」(Haraway,1991=2000:315) という。その意味で、サイボーグは、新たなテクノロジーが支配する情報資本主義の抑圧への抵抗のメタファーなのである。ハラウエイはこの宣言の最後に次のように述べている。

サイボーグのイメージは、私たちが自分の身体や道具について説明してきた二元論の迷路から抜け出すことを示唆してくれる。これは共通語の夢ではなく、強力な異教徒の異言語の夢である。それは、新右翼のスーパーセイバーの回路に恐怖を与えるために、異言で語るフェミニストの想像力である。それは、機械、アイデンティティ、カテゴリー、人間関係、空間の物語を構築し、破壊することを意味する。(Haraway,1985=2006:147)

ここで語られているのはサイボーグのイメージであり、具体的には「有色女性」に代表されるマイノリティである。このようなハラウエイの主張に対して、巽孝之はアメリカのフェミニスト歴史研究者のジョアン・スコットの批判を紹介する。すなわち、左翼系白人女性がマイノリティ・女性労働者に託すロマンティシズムと変わらないのではないかという批判である。さらに、社会主義フェミニズムへの吟味不足や科学技術決定論気味である点も批判の対象となる。これに対して、巽はハラウエイの主張のポイントは、「遺伝子が進化機械を作り貨幣が資本主義社会を築くことの間アナロジー以上のものを見出すこと。ひいては、後期資本主義社会における社会生物学の可能性を、人間のみならず霊長類社会全般に通底する制御・抑圧システムとしてのサイバネティクスに看破すること」だと述べている (巽、2001:270)。

つまり、ハラウエイは貨幣=社会を制御するコードと遺伝子=進化を制御する

コードの類似性を指摘するだけではなく、それ以上の課題について語っているというのである。巽の言う「後期資本主義社会における社会生物学の可能性」が「人間のみならず霊長類社会全般に通底する制御・抑圧システムとしてのサイバネティックス」へと向かうということは、人間のみならず、地球規模の生態系全体の統制へと向かうということである。人間がそれを意図しようとしまいと、資本主義自体にそのようなシステムが内在されている。遺伝子工学は人間のみならず動物・植物・微生物・ウイルスに広く応用され、医療・農業・畜産・環境分野で研究開発が進められている。しかし、クローン技術の人間への応用や遺伝子操作によって「人化マウス」のように、人間（ヒト）と動物の境目が曖昧になるなど、数多くの倫理的な問題が生じている。このような進歩は一方では、人間に多大な恩恵を与えるが、同時に資本主義システムはこれらの技術の特権階級が商品化し、支配することによって、人間を含むあらゆる生命と生態系がそのシステムに取り込まれてしまうだろう。

サイボーグというメタファは、このような遺伝子工学を含む情報工学を土台とした資本主義システムによる生態系全体への制御支配への抵抗のメタファであり、支配階級から排除される——とりわけ有色女性に代表されるような複数の被支配的特性をもつ——マイノリティがラダイト的な反テクノロジーに陥ることなく、抵抗する視点をもたらしものだと考えられる。ちなみに、小谷真理はハラウェイが用いた「有色女性」がシリコンバレーで働く有色人種、とりわけメキシコ系黒人女性を指していると述べている。彼女たちは二重の抑圧構造のもとにいつつも、「産業構造の変化にともなって複雑な抑圧構造を逃げる世界でサバイバルしていくためのさまざまな戦略を行使する存在」だという（巽、2001:315）。このことはハラウェイのイメージする「サイボーグ」がどのようなものなのか、示唆するといえるだろう。

とはいえ、本稿の冒頭に書いたように、私たちは1980年代ではなく、2020年代を生きており、サイボーグをめぐる社会的状況は大きく変化している。コペンハーゲン大学のニェルップは、「精神的なサイバネティクスを部分的に研究するサイボーグ人類学の分野に目を向けると、スマートフォンは実際に私たちの接続能力を拡張し、私たちの接続性は現代社会の不可欠な一部」となっており、「これらのデバイスによって手の届く範囲（能力）を拡張しても、私たちは依然として

人間であり、サイボーグとみなすことができる」と指摘している (Nyrup, 2016:14)。すなわちデジタルテクノロジーの進化に伴い、サイボーグが暗喩するのは「有色女性」であるだけでなく、スマートフォンの利用者、とりわけミレニウム世代以降のデジタルネイティブと呼ばれる若者たちである。では、ハラウェイの思想はどのように受け継がれていったのだろうか。

ハラウェイ自身、2016年に行われたインタビューの中で「ポストヒューマニズム」について語っている。まず彼女は「ポストヒューマン」という用語を否定する。この用語は「口語的には強化された宇宙人種やポスト宇宙人種タイプの人間、つまり人類の最終的な軌跡のために惑星外に出て行くような人間を意味するので、まったく役に立たない」という。一方、「ポストヒューマニズム」はまったく別のものを意味すると指摘する。それは「ひどく複雑な歴史を持つヒューマニズムの歴史、意味、可能性、暴力性、そして希望への検証や探求を示すもの」だという (Franklin, 2017:2)。しかし、ハラウェイ自身は「ポストヒューマニズム」の理論にとりわけ関心を示したわけではなく、むしろ否定的でさえあった。フェミニズムの立場からポストヒューマニズムの理論構築にもっとも大きな影響を与えたのはロージ・ブライドッティである。

2. ブライドッティとアッサンブラージュ、ノマド的主体

ブライドッティは2006年にハラウェイの理論に関する論文を書いている。この論文からブライドッティが彼女の思想をどのように理解し、何を受け継いだのかを理解することができる。では、ブライドッティはハラウェイのサイボーグ論をどのように評価し、どのように受け継いだらうか。ブライドッティはハラウェイの研究成果を「現代のバイオテクノロジー科学の文化と、人間科学や社会科学の文化との接点を設定する先駆的な取り組み」だと評価する。すでにこの論考でも触れたように、ハラウェイは「ポストヒューマン」という用語に対しては否定的であるが、ブライドッティによれば、他方でハラウェイは「植民地主義やファシズムのようなヨーロッパ文化の歴史的側面に対する説明責任を優先」しており、それはヨーロッパが公言しているヒューマニズムの理想や原則に対する信念とは「公然と対立」するものだという (Braidotti, 2006:198)。

ブライドッティが、とりわけ関心を示すのは、ハラウェイが研究してきた生物

学の知見とテクノロジーを見事に接続してみせたことである。「サイボーグ」というメタファはその結節点である。しかし、それはサイバーパンク論にとどまるのではなく、政治的な存在としてみなされる。ブライドッティは身体と権力の関係について、ハラウェイによるフーコー批判を取り上げ、フーコーの思想が時代遅れになっていると指摘している。ブライドッティにとって、ハラウェイは女性の分析を組み込んでいる点で、フーコーよりもラディカルなのである。彼女によれば、ハラウェイは白人資本主義の家父長制が「支配の情報学」に取って代わり、女性が新しいテクノロジーによって共食いさせられていることを指摘した上で、このようなテクノロジーが主導する時代の身体の政治学を問うているのである。ブライドッティは、ハラウェイが用いる「サイボーグ」概念について次のように説明する。

ハラウェイのサイボーグは、現在形成されつつある新たなテクノロジー社会に関する議論の中心に対立意識を挿入し、生存と社会正義に関するより広範な議論の中で、ジェンダーと性的差異の問題を浮き彫りにする。それゆえ、支配の情報化の時代には、権力関係や倫理的・政治的抵抗の問題が、これまで以上に重要な意味を持つようになる (Braidotti,2006:199)。

ブライドッティにとって、ハラウェイの「サイボーグ」概念はテクノロジー社会におけるジェンダーや性的差異をめぐる政治性を有するものである。ハラウェイは、身体を単なる自然な有機体としてみなすのではなく、資本やテクノロジー、メディア、軍事によって絶えず再構成される「政治の場」として捉えるバイオ・ポリティクスを提唱しているのである。ブライドッティは「サイボーグや伴侶種 (companion species) といった形象 (figurations) の機能は抽象的なものではなく、むしろ政治的なもの」だという (Braidotti,2006:200)。ここでいう伴侶種とは、ハラウェイが2003年に出版した『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」』で提起された用語であり、種を超えて共に生きる存在を意味している。ブライドッティにとって、サイボーグと伴侶種は、共に人間中心主義を乗り越えるための概念なのである。

ブライドッティは2013年に出版した『ポストヒューマン』の中でもサイボーグ

について次のように書いている。

サイボーグこそが支配的な社会的・文化的編成物であり、それは、多くの政治的および経済的な含意をとめない社会の網の目を縫って作用している。ウイトルウィウスの人間はサイバネティックになったのだ。この主張を的確にするために、すべての技術は、身体をもつ主体と交わると、それに強い生政治的影響を及ぼすと付け加えて述べておこう。かくしてサイボーグには、ハイテクジェット戦闘機のパイロットやアスリートや映画俳優といった魅惑的な身体だけではなく、低賃金のデジタル・プロレタリアートたちという匿名の大衆も含まれることになる。(Braidotti, 2013=2019:137)

ここでいう「ウイトルウィウスの人間」とは、レオナルド・ダ・ビンチの「ウイトルウィウスの人体図」で描かれている人間のことである。この人体図はルネサンス期のヨーロッパのみならず、近代白人男性社会の理想的人間のモデルとなった。白人男性をモデルとした人間中心主義をめぐるポリティクスは、そのままサイボーグのイメージをめぐるポリティクスへと展開する。ブライドッティは、SFに描かれるサイボーグのイメージとして、「ハイテクジェット戦闘機のパイロット」と「低賃金のデジタル・プロレタリアート」という二つの人間像を対比させて、その政治的意味を問うたのである。サイボーグだけではない。ブライドッティは「フェミニズム／ウーマニズム／クイア／サイボーグ／ディアスポラの主体、ネイティヴやノマドの主体、さらにはオンコマウスや羊のドリーなどの比喻形象は、単なる隠喩ではなく、特定の地政学的・歴史的な場所を示す道標」だと書いている (Braidotti, 2013=2019:249)。ここでいうウーマニズムとは、「黒人女性労働者」に代表されるような複数の抑圧形態のもとに置かれた女性たちによる、社会変革をめざす思想と運動を指す。また、オンコマウスとは、遺伝子工学によって発癌させられたマウスのことである。オンコマウスについては、たびたびハラウェイも言及している。ブライドッティにとって、サイボーグやフェミニズム、ウーマニズム、そしてオンコマウスに至るまで、これらはすべてポストヒューマニズムにおけるメタファー（形象）であると同時に、実在する道標であるという。

ブライドッティはこれらの形象の中でとりわけ重視するのがノマドである。彼女は次のように述べている。

ノマドの思想では、根本的に内在する集中的な身体とは、一般に「個人的な」自己として知られる特異な構成の中で、空間的に固まり、時間的に統合される力、あるいは流れ、激しさ、情熱のアッサンブラージュ (assemblage) である。この集中的でダイナミックな実体は、合理主義的な内的法則の羅列とも一致しないし、単なる遺伝データや情報の展開とも一致しない。それはむしろ、維持するのに十分安定した力の一部であり、破壊的ではないものの、絶え間ない変容の流動を受けるものである (Braidotti,2006:201)。

アッサンブラージュこそがブライドッティの考えるポストヒューマニズムの基本原理の一つであり、人間だけではなく、動物や植物などの生態系や物質、テクノロジーなどが互いに影響を及ぼしながら形作られる動的な集合体のことをいう。すなわち、主体は単一の自律的な個体ではなく、アッサンブラージュなのである。そしてノマドの主体 (nomadic subject) は集合的なアッサンブラージュそのものを指しており、それは「絶え間ない変容の流動を受けるもの」なのである。この論考は「サイボーグとノマド的主体は、永続する仲間」という言葉で締めくくられている (Braidotti,2006:207)。この言葉は彼女がハラウェイからサイボーグが意味するものを受け継ぎつつ、彼女の創り出した概念であるノマド的主体へと引き継ぐという意味を示したものであろう。ブライドッティは、2014年の論考の中で、「ノマド的主体は、文化的、政治的、認識論的、倫理的な関心から、現在を地図的に読み解く (cartographic reading) 作業に従事するために、私が選んだ形象 (figuration) である。それは、世界に対する飽くなき、愛に満ちた好奇心を表現するための私の好みの方法」だとより明瞭な言い方で説明している (Braidotti,2014:167)。さらにわかりやすい表現がある。彼女が2014年に行った講演の記録である。そこで彼女は「ノマド的主体は決して人間の状態の新たなメタファーとして捉えるべきではなく、むしろグローバルなハイブリディティの時代において位置づけられた、つまり埋め込まれ、体現された社会的立場の物質論的マッピングを構成するのに役立つカートグラフィー (地図制作) のツールとして

捉えるべき」と主張したという (Braidotti, 2014, October 7)。

ブライドッティにとって重要な用語として、ビオス (bios) とゾーエ (zoe) がある。ビオスは人間に固有な生命を意味し、ゾーエは非人間的な生命を意味する。人間中心主義はビオスの特権化してきた。しかし、人新世 (anthropocene) は高度なテクノロジーを通して、それら二つを分つ境界線を曖昧なものにしている。ブライドッティは次のように述べている。

人新世はまた、高度な技術的メデイエーションの時代とも重なり、人間中心主義に内側から挑戦している。それゆえ、人間中心主義の脱中心化は、動物や人間以外の存在の生命であるゾーイから、人間の特権としての生命であるビオスを引き離すことに挑戦している。その代わりに、この数十年で前面に出てきたのは、科学的・文化的実践の認識だけでなく、非単一的でノマド的で拡張された自己の、具現化された、埋め込まれた、関係的で感情的な構造のビジョンにも影響を与える、自然構造の連続性である。この転換は、創造の王としての人間という支配的な構図からの一種の人類学的脱出、つまり種の巨大なハイブリッド化とみなすことができる。(Braidotti, 2016:381)

人新世は人間が自然環境を制御することをいっそう困難なものにしつつある。例えば、人間活動が作り出した気候変動は、人間が制御できないほど地球環境を破壊しつつある。テクノロジーの進化も同様に、例えばソーシャルメディアや生成 AI の登場によって、民主主義制度を脅かすに至った。これらのテクノロジーは身体と生活にまで深く組み込まれつつある。これら二つの状況は、人間の特権的生 (ビオス) の崩壊を招き、非人間的な生 (ゾーイ) との連続性や相互依存性を一層際立たせている。こうした現状の中で、人間は「種の巨大なハイブリッド化」のプロセスにおける他の主体とのアッサンブラージュの一部なのである。

3. バラッドのエージェンシャル・リアリズム

前節で検討したブライドッティの理論の土台には、ネオマテリアリズムもしくはニューマテリアリズムと呼ばれる哲学の体系が存在する。ブライドッティは「ネオマテリアリズムの基本的立場は、生命を媒介とする認知資本主義の加速主

義的で利益至上主義的な知識実践に対して、強固な反証を提供する」と主張する (Braidotti, 2019:42)。ポストヒューマニズムの理論体系にはそれを支えるいくつかの重要な哲学体系があることを忘れてはいけないだろう。

一つはブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論 (ANT) である。ANT は哲学というよりも、むしろこれまでの社会学の方法を批判的に検討して作られてきた新たな社会学の方法論であるが、人間以外の主体の記述を重視したことによって、ポストヒューマニズムに影響をもたらすことになった。ANT を一言で言い表すことは困難であるが、代表的論者のラトゥールによれば、「アクターネットワークという表現における「アクター」とは、行為の源ではなく、無数の事物が群がってくる動的な標的である。その複数性を取り戻すための最もわかりやすい解法は、これまで^{プレスホルダー}代用記号として問題なく使ってきた`アクター`の語に含まれるメタファーを復活させること」である (Latour, 2005=2019:88)。要するに、ANT における「アクター」とは単独の行為主体ではなく、多数の事物がまとわりつく「動的な標的」である。ANT は、社会やグループを所与の前提にするのではなく、その形成過程を物質的アクターも含めて記述することを求める。こうした主張は、ポストヒューマニズムと通底する部分を有するため、ブライドッティも次のように参照する。「知識生産システムにおける人間以外のアクターの重要性は、科学技術研究において卓越した歴史を持っており、アクター・ネットワーク理論はこの伝統の一部である」(Braidotti, 2019:42)。しかし、ANT はアクターの政治性を問うことをしておらず、それゆえに参照はされつつも、ポストヒューマニズムの範疇には含まれない。一方で、ANT はより哲学的な理論であり、ハイデッガーに連なるオブジェクト指向存在論 (Object-Oriented Ontology)、いわゆる「OOO」と呼ばれるグレーム・ハーマンの哲学理論と接続している (Harman, 2010=2017)。

ポストヒューマニズムの原理となっているもう一つの哲学はカレン・バラッドの「エージェンシャル・リアリズム (agential realism)」と呼ばれる存在論・認識論的枠組みである。バラッドの哲学は、上記二つの社会理論や哲学と異なり、ポスト構造主義やフェミニズムを受け継いだポストヒューマニズムの哲学理論として一般的に認知されている。そして彼女の哲学は、ニールス・ボーアの量子力学を土台としたニュー・マテリアリズム哲学として理解されている。バラッドの

理論は、存在を事物ではなく現象としてみなす。量子物理学では、「量子もつれ (quantum entanglement)」と呼ばれる現象がある。二つ以上の量子がどんなに遠く離れていても互いに関係し、影響を与え合う現象であり、古典的な物理学では説明することができない。ボーアはこの問題を、観測装置を含めた実験状況の全体的性質として説明しようとした。ボーアは実験装置を含む「関係する実験配置」と量子間の「交換される運動量」を「個別に考慮する可能性」を否定する (Bohr,1935:697)。これは関係論的存在論といえるものである。このボーアの理論を踏まえつつ、バラッドは次のように書いている。

エージェンシャル・リアリズムの存在論のさらなる精緻化として、私は、現象は人間主体によって設計された実験室実践の単なる結果ではなく、むしろ、複数の物質——言説的实践や身体生産の装置の複雑なエージェンシー的内部作用を通して生み出される物質化の差異化パターン (回折パターン) であり、装置は単なる観測の道具ではなく、問題 = 物質となる境界線を引く実践、すなわち世界の特定の物質的 (再) 構成であると主張する。この因果的内部作用には人間が関与する必要はない。実際、人間／非人間、文化／自然、科学／社会との間の境界が構成されるのは、このような実践を通してなのである。(Barad,2007=2023:172)

このように、存在論としてのエージェンシャル・リアリズムは、ボーアの量子物理学を土台とすることによって、思弁哲学ではなく、科学哲学の衣を得ることとなった。結論として、主体／客体、観察者／観察対象といった二項対立の実存論を否定するとともに、意味は物質から切り離された言葉から生成されるのではなく、物質一言説的实践のプロセスによって生成される。バラッドは次のように指摘している。

存在論的基本単位は「もの」ではなく、現象、すなわち世界の動的でトポロジー的な再構成／もつれ／関係性／(再)編成である。そして、意味論的基本単位は「言葉」ではなく、(存在論的、意味論的)境界が制定される物質一言説的实践である。このダイナミズムがエージェンシーである。エージェン

シーは属性ではなく、世界の進行中の再構成である。宇宙は、宇宙自らが生成していく中でのエージェンシーの内部作用なのだ。(Barad,2007=2023:173)

このことをバラッドは簡潔に「物質と意味のもつれ」と表現し、主著のサブタイトルに入れている。

もう一つ重要な点は、バラッドが「物質化の差異化」として回折 (diffraction) という言葉を用いている点である。回折はハラウェイが用いていた概念であり、バラッドはそれをボーアの量子物理学と結びつけて発展させた。「量子もつれ」と呼ばれる現象を証明する際に用いられたのが光の回折であった²。バラッドはハラウェイが提案した概念 (Haraway, 1992, 2018) に、量子物理学の土台を与えたのである。バラッドは次のように書いている。

ダナ・ハラウェイが示唆するように、回折は反射にたいして有用な対照物として機能し得る。どちらも光学現象であるが、反射のメタファーは鏡映と同一性のテーマを反映するのにたいし、回折は差異のパターンによって特徴づけられる。ハラウェイは、この比喩的な区別に注目することで、知ることの比喩として広く使われている反射 = 内省 (reflection) という概念の重要な難点と、それに関連して理論や研究者が調査に及ぼす影響を考慮に入れる自己説明の方法や理論として (社会科学において) 用いられる再帰性 (reflexivity) という同種の概念がもつ問題点に光をあてる。(Barad,2007 = 2023:100)

ハラウェイとバラッドは反射 = 内省に対して、回折の重要性を強調した。回折は世界に変化をもたらすための批判的実践であるとみなしたのである。そしてそれこそがエージェンシャル・リアリズムによる実践アプローチである。バラッドは次のように述べている。

重要なのは、(まるで世界が容器であり、私たちはその中に置かれているのだということをつたえただけ認識すれば済むかのように) 単に観察者や知るものを世界の中に戻すことではなく、私たちもまた世界の差異的な生成の一部であると

いう事実を理解し、それを考慮に入れることなのである。さらに、知識の実践が物質的な結果をもたらすというだけではなく、知るという実践が世界の(再)構成の一端をになう特定の物質的関与であるということが重要なのだ。私たちがおこなう実践が(まさに言葉の両方の意味で)問題=物質となる。知識を作るとは単に事実^{ファクト}を作るのではなく、世界を作ること、つまりある特定の世界の構成を作りあげることである。しかし、その構成を無から生み出したり、言語、信念、概念から作り出すのではなく、世界の一部として世界に特定の物質的な形を与えることに物質的に関与するのである(Barad,2007=2023:118-119)。

ここでバラッドは回折が意味する批判的実践のあり方をより詳細に記述している。実践を調査しようと思うならば、観察者もまた世界の差異を生成する一部であることを自覚しなければならない。そして新たな事実を知ること自体が世界を(再)構成する実践なのである。この主張は、調査主体の客観的立場という概念を根本から否定することになる。観察主体はアッサンプラージュの内部に埋め込まれており、さらに、その調査行為がそれ自体もまた、世界を作り変える批判的実践として捉えることができる。バラッドのこのような批判的実践を含むエージェンシャル・リアリズムは、フェミニズム・ニューマテリアリズムとも呼ばれている。

小結：教育学に対する示唆

ハラウェイ、ブライドツェッティそしてバラッドらのフェミニズムを土台としたポストヒューマニズムを構成する諸概念はどのように教育学に適用することができるだろうか。ポストヒューマニズムはすでに教育学にも影響を与えている。とりわけ、生成 AI の登場によって、再びこの分野に注目が集まりつつある。例えば、ネイサン・スナザとジョン・A・ウィーバーが監修した『ポストヒューマニズムと教育研究』はその代表的な著作である(Snaza & Weaver, 2015)。また、本稿冒頭でも触れたように、『子ども学』第13号の特集テーマはポストヒューマニズムである。編者の小玉重夫は「近年の子ども期研究 (childhood studies) は、ポストヒューマニズムとポストコロニアリズムの影響のもとに急速な進展を遂げ、

教育や保育の実践を変えつつある」と指摘しつつ、日本での理解はまだ十分とは言えないと述べる。その上で、「たとえば『主体』という概念としばしば混同されがちなエージェンシーについての検討を含め、さらなる研究を進めつつ、今後の現場での実践や大学などでの養成教育に導入していくことが、喫緊の課題となっている」と指摘している（小玉、2025）。これらポストヒューマニズムと教育学との先行研究の検討については、今後の課題としたい。ここでは先行研究を検討するための若干の概念整理を行う。

これまでのハラウェイ、ブライドッティおよびバラッドらの研究成果は、「政治性」の観点を重視するフェミニズム思想を共有しており、一般的に彼女らのポストヒューマニズムは批判的ポストヒューマニズムと呼ばれる。この中でも哲学的土台としてのニューマテリアリズムをもたらしたのはバラッドの「エージェンシャル・リアリズム」である。その上にブライドッティのアッサンプラージュとノマド的主体論が位置づくと言えるだろう。ハラウェイはポストヒューマニズムの研究者というよりは、ポストヒューマニズム思想の先駆者として位置付けられる。とりわけ、サイボーグに関する議論はソーシャルメディアやAIテクノロジーの急速な発展とともに再び注目を集めつつある。

教育学にとって重要な論点は以下の3点である。一つは上記に示した小玉が指摘するように、教育における主体概念の位置付けである。これまでの支配的な教育学では、主体性（エージェンシー）は個人の内部属性とみなされてきた。つまり、子どもを発達可能体、すなわち非完全な個人としてみなすことを前提としてきたのである。ポストヒューマニズムは人間を他者から独立した個人としてではなく、物理的環境やテクノロジー、生態系、制度などの絡まり（アッサンプラージュ）を分有する存在として見る。これはすなわち教育学における「人間中心主義」からの根本的な転換である。これは一体何を意味するのだろうか。

子どもの発達子ども個人に内在する現象ではなく、物質的・生体的環境を含む他者との関係の中で生じる現象であり、それらは分かち難く結びついている。物理的な環境とそれを意味づける意識には「もつれ」が生じる。教職員もしくは保護者の意識と物理的環境などを含む子どもの発達をめぐる現象は必ずしも一致していない。私たちはそれらの総体をアッサンプラージュとしてみなすことが求められる。私たちが見ているものは、子どもの現実の確実な反映ではない。見る

こと自体が一つの回折であり、実践としてアッサンブラージュの内部に関わっている。

二つ目は学習概念の捉え直しである。教育における主体概念の捉え直しは学習の捉え直しにつながる。学習は個人の中に蓄積されるものではなく、物理的環境やテクノロジー、生態系、制度などのアッサンブラージュの生成過程として捉えられる。つまり、個人の能力の測定は、実際のところ個人の能力を測っているのではなく、測ること自体がアッサンブラージュの生成プロセスの一部なのである。カリキュラムもまた、個人の能力形成を中心とするのではなく、学校のテクノロジーを含む物理的環境や自然環境、そして学習者を含む人間関係総体の形成過程を前提としたものでなければならない。

学習におけるテクノロジーの活用については、もはや学習主体と道具という二項対立図式に基づく見方は正しくないというべきである。デジタルデバイスもまたアッサンブラージュを形成する要素の一つであり、しかもそれは固定したものではなく、絶えず流動的に変化する。テクノロジーの活用とは、テクノロジーを一つのエイジェンシーの要素としてアッサンブラージュに組み込むことを意味する。さらに、生成 AI の登場は、学校におけるアッサンブラージュの形態を大きく変える可能性がある。

三つ目は環境教育の重視である。ブライドッティが指摘したように、人新世は人間が制御できないほど地球環境を破壊しつつある。その結果として、人間は地球の生態系と運命をともにしなければならないことを自覚しなければならなくなった。人間のための環境教育から、人間を含む生態系全体を対象とした地球の持続可能性を中心課題とする環境教育が必要である。ユネスコは2021年に「教育の未来に関する国際委員会」報告書「ともに未来を再考する：教育の新しい社会契約」を発表した。そこには、次のように記述されている。「私たちは今すぐ、互いとの関係、生きている地球との関係、そしてテクノロジーとの関係を再構築する必要がある。私たちは、相互依存関係、そして人間以上の世界における人間の居場所とエイジェンシーを学び直さなければならない」(UNESCO,2021:8)。この報告書がポストヒューマンイズムの影響を受けて書かれたことがわかるだろう。新たな環境教育は、新しい時代のSDGsに不可欠な要素である。

この3つの観点の土台として、批判的ポストヒューマンイズムが西欧白人男性を

モデルとした人間中心主義を批判し、植民地主義、家父長主義、資本主義を乗り越えようとするものであることを忘れてはならない。この新たな教育学は、絶えず「人間」とは誰のことなのか、研究者や教育者は、無意識のうちに、どんな人間をモデルにしているのかを問う。同時に、調査主体としての研究者や教育実践主体としての教育者自身が、客観的で価値中立的な立場にはいないことを自覚する。彼らもまたアッサンブラージュの創発的な関与をする存在である。教育実践は教育者による主体的な取り組みなのではなく、物質的環境を含む多様なエイジェンシーが絡み合うアッサンブラージュの形成過程なのである。人間中心主義がもたらす抑圧に自覚的であるとともに、人新世において非生命的存在を含むあらゆる存在が共生・共存する地球の持続可能性の確保を目標としなければならない。

注

- 1 Romero-Hallらは、教育工学（インストラクショナル・デザイン）における支配的な勢力によって沈黙させられた女性の声に焦点を当てるフェミニストアプローチとしての「批判的オートエスノグラフィー」の導入によって教育工学に風穴を開けようとする。このアプローチの導入は、教育工学の問題が組織の問題としてのみならず、男性中心主義的な学問そのものの問題として認識されていることを意味している。
- 2 NHK スペシャル「量子もつれ アインシュタイン 最後の謎」（2024年12月28日放送）で量子もつれに関する光の回折（干渉）実験が詳しく紹介されている。

参考文献

- Althusser, L. (1968). *La Philosophie Comme De la Révolution - réponses à huit questions-*, Pensée, avril (「革命の武器としての哲学——八つの質問にたいする回答」『国家とイデオロギー』西川長夫訳、福村出版、1975年)
- Althusser, L et Balibar, E. (1968). *Lire Le Capital*. (『資本論を読む』権寧・神戸仁彦訳、合同出版、1974年)
- Barad, K. (2007). *Meeting the universe halfway: Quantum physics and the entanglement of matter and meaning*. Duke University Press. (『宇宙の途上で出会う——量子物理学からみる物質と意味のもつれ』水田博子・南菜緒子・南晃訳、人文書院、2023年)

- Bohr, N. (1935). Can quantum-mechanical description of physical reality be considered complete? *Physical Review*, 48, 696-702. <https://doi.org/10.1103/PhysRev.48.696>
- Braidotti, R. (2006). Posthuman, All Too Human Towards a New Process Ontology. *Theory, Culture & Society*, 23 (7-8), 197-208. DOI: 10.1177/0263276406069232
- Braidotti, R. (2013). *The Posthuman*. Cambridge: Polity Press. (『ポストヒューマン——新しい人文学に向けて』門林岳史監訳、フィルムアート社、2019年)
- Braidotti, R. (2014). Writing as a nomadic subject. *Comparative Critical Studies*, 11 (2-3), 163-183. <https://doi.org/10.3366/ccs.2014.0122>
- Braidotti, R. (2014, October 7). Thinking as a Nomadic Subject [Lecture]. ICI Berlin. <https://doi.org/10.25620/e141007>
- Braidotti, R. (2016). The critical posthumanities; or, is medianatures to naturecultures as zoe is to bios? *Cultural Politics*, 12 (3), 380-390. <https://doi.org/10.1215/17432197-3648930>
- Braidotti, R. (2019). A theoretical framework for the critical posthumanities. *Theory, Culture & Society*, 36 (6), 31-61. <https://doi.org/10.1177/0263276418771486>
- Franklin, S. (2017). Staying with the manifesto: An interview with Donna Haraway. *Theory, Culture & Society*, 34 (4), 49-63. <https://doi.org/10.1177/0263276417693290>
- Haraway, D. J. (1985). A Cyborg Manifesto: Science, Technology, and Socialist-Feminism in the Late 20th Century. In J. Weiss et al. (eds.), *The International Handbook of Virtual Learning Environments* (pp. 117-158). Dordrecht: Springer, 2006.
- なお、上記の版は1985年版と1989年版を統合し、失われていた注や参照を復元した異同対校版である。
- Haraway, D. J. (1991). *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*. (『猿と女とサイボーグ：自然の再発明』高橋さきの訳、青土社、2000年)
- Haraway, D. J. (1992). The promises of monsters: A regenerative politics for inappropriate/d others. In L. Grossberg, C. Nelson, & P. A. Treichler (Eds.), *Cultural studies* (pp. 295-337). Routledge.
- Haraway, D. J. (2000). *How Like a Leaf. An Interview with Thyrza Nichols Goodeve*. (『サイボーグ・ダイアローグズ』高橋透・北村有紀子訳、水声社、2007年)
- Haraway, D. J. (2003). *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*. Chicago: Prickly Paradigm Press. (『伴侶種宣言——犬と人の「重要な他者性」』永野文香訳、以文社、2013年)

- Haraway, D. J. (2018). *Modest_Witness@Second_Millennium.FemaleMan_Meets_OncoMouse: Feminism and technoscience* (2nd ed.). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9780203731093>
- Harman, G. (2010). *The quadruple object*. Winchester, UK: Zero Books. (『四方対象——ハーマン四方対象論入門』岡嶋隆佑監訳、人文書院、2017年)
- Latour, B. (2005). *Reassembling the social: An introduction to actor-network-theory*. Oxford University Press. (『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年)
- Nyrup, T. (2016). Smart phones as an embodied technology. Academia.edu, preprint, 19 April 2016. Retrieved December 29, 2025, from: https://www.academia.edu/24584176/Smart_phones_as_an_embodied_technology
- Romero-Hall, E., Aldemir, T., Colorado-Resa, J., Dickson-Deane, C., Watson, G. S., & Sadaf, A. (2018). Undisclosed stories of instructional design female scholars in academia. *Women's Studies International Forum*. November–December. Elsevier.
- Snaza, N., & Weaver, J.A. (2015). *Posthumanism and Educational Research*. New York: Routledge.
- UNESCO. (2021). Reimagining our futures together: a new social contract for education. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000379707>
- 巽孝之編著 (2001) サイボーグ・フェミニズム [増補版]、水声社
- 小玉重夫 (2025) 「本特集「ポストヒューマニズムと子どものエージェンシー」とは」『子ども学』(13)、白梅学園大学子ども学研究所

ABSTRACT

Post-Humanism and the Future of Education: Fundamental Concepts and Implications for Pedagogy

Jun SAKAMOTO

This paper is a theoretical study that elucidates key concepts in posthumanism and explores how they reconfigure pedagogy. It argues that the rise of social media and generative AI has qualitatively transformed relations between humans and non-humans, as well as between nature and technology, thereby exposing the limits of humanist, anthropocentric educational theory. The essay revisits Donna Haraway's "Cyborg Manifesto" as a feminist intervention in a poststructuralist, anti-humanist genealogy and interprets the cyborg as a figure that contests the white, male-centered "image of the human" while critiquing information capitalism and the "informatics of domination." It then turns to Rosi Braidotti's posthuman theory, especially the notions of assemblage, the nomadic subject, and bios/zoe, to show how anthropocentrism is decentered in the Anthropocene and how humanity must be understood within a "massive hybridization of species." Finally, drawing on Karen Barad's agential realism, the paper conceptualizes knowledge practices as material interventions in the "entanglement of matter and meaning," positioning researchers and educators as agencies within assemblages rather than neutral observers. On this basis, it outlines implications for pedagogy in terms of subjectivity, learning, and environmental education, and argues that critical posthumanism offers a conceptual foundation for a new pedagogy oriented toward global symbiosis.